

「英語コミュニケーション」における授業実践と 授業改善

著者	西崎 有多子
雑誌名	東邦学誌
巻	35
号	1
ページ	55-66
発行年	2006-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1532/00000098/

「英語コミュニケーションI」における授業実践と授業改善

西崎 有多子

目次

はじめに

1 短大英語科目の変遷

2 学生の特質

(1) レベル

(2) 受講姿勢

3 授業条件

(1) 当該科目の位置づけ

(2) クラスサイズ

(3) 使用教室

4 科目目標設定とインターネット

5 教材

(1) 選択にあたっての留意点

(2) 配布方法

(3) プリント集1~3

6 成績評価

(1) 方法と開示

(2) レポート

(3) 小テスト

(7) 中間・学期末テスト

7 学生による授業評価結果

8 更なる授業改善に向けて

はじめに

2003年度から総合基礎科目の1つである「英語コミュニケーションI」を担当させて頂いて3年が経った。インターネットから選択した、すべてauthenticな英文の情報を教材として用い

るこの授業は、筆者にとっては、big changeとも言える新しい挑戦であった。毎年small change [1] を繰り返し、少しずつ授業改善を行ってきた、3年間の授業実践をここにまとめることにより更なる改善の出発点としたい。

1 短大英語科目の変遷

かつての商経科秘書専攻1994年度生において、英語科目は、基礎課程の「英語I」「総合英語」「リスニングセミナー」「オーラルコミュニケーション」の4科目に加えて専門科目として「英会話I」「英会話II」「ビジネス英会話I」「ビジネス英会話II」「ビジネスイングリッシュI」「ビジネスイングリッシュII」の6科目が開講されていた。その後1998年度生に対して各科共通の基礎課程は「総合英語I」「総合英語II」「オーラルコミュニケーション」の3科目とされたが、商経科秘書専攻に限ってみると専門科目として「ビジネスイングリッシュI」「ビジネスイングリッシュII」に加えて「基礎通訳」「英文秘書実務I」「英文秘書実務II」「英検演習」「英文ワープロ」が開講され、英語科目はバラエティに富み、とても充実したものとなっていた。1999年度生には、基礎課程において「英語I」「英語II」「英語III」「英語IV」が分野別に開講され、それぞれreading、

listening, speakingを重点的に学ぶことができた。これらの科目では教師はより明確な科目目標を設定でき、学生も学びたいクラスで集中的に学習することが可能であった。2001年度に科目の改廃が行われ、英語科目は総合基礎科目として「英語コミュニケーションⅠ」「英語コミュニケーションⅡ」のみとされ、関連科目として「英会話」「ビジネスイングリッシュ」、実務科目として「英語検定」が置かれた。結果として英語関連科目の数は一気に激減することとなった。

限られた開講科目の中で、学生にとって少なくなった機会をより有効にするための授業の工夫と科目間の授業内容の調整がこれまで以上に重要になった。

2 学生の特質

(1) レベル

初回の授業でのアンケート結果によると、大半は英語が苦手が好きではないと回答し、英語は得意ではないが好きであると答える学生は3分の1を下回っている。一方で興味を持っている、もっと英語を勉強したいという学生も少なからず履修している。毎年英語が特に得意な学生が数人おり、いずれも女子学生である。その学生達のレベルは、「英語検定」を履修し同時に宿題等で自宅での学習を促せば、ほぼ確実に実用英語検定準2級に、まれに2級に合格できるという段階にある。それ以外の殆どの学生は、高校で学んでいるはずの文法事項等が身につけておらず、語彙は高校1年生程度のレベルのまままで本学に入学している。学生のクラス内のレベルと意欲の差はスタート時から大きい。毎回の授業の中で、どのレベルの学生も知的好奇心において満足と学習効果が得られる工夫が必要である。

(2) 受講姿勢

私語は最初から注意をする為ほとんどないが、頻繁に複数の遅刻者が存在する。授業開始後30分以上経った後、前のドアから傍若無人に入室する学生もおり、そのたびに授業が中断されてしまう。注意をされて次回から遅刻をしない学生もいるが、残念ながら何度も同じ事を繰り返す学生もいる。有効な指導方法を考える必要がある。

出席は必ずとるが、出席率は一部の欠席が多い学生を除いて、ほとんどの学生は極めて良好である。多くが1年生であり、よい意味での高校時の習慣が残っている時期でもある。皆出席の学生が約半数を占め、3回以内の欠席者が散見され、履修登録だけ行い全くまたはほとんど出席しない学生も少数であるが存在する。欠席過多学生には出席を促したいが、顔もわからない場合が殆どであり、直接働きかけることが難しい。そのため、ホームルーム的意味合いの演習クラスの担当の先生方に、学生の様子を伺ったり、出席するように伝言して頂くなど、協力をお願いしている。

教師の質問に対して指名せずに自由に発言を促す場合は、学生から活発に発言がある。授業中の雰囲気は明るく、教材やスクリーンに映し出されるウェブサイトに興味がある場合は、とても熱心に、まっすぐな姿勢で取り組んでいる。しかし、興味を持たせたまま授業に惹きつけ続けないとすぐに飽きてしまう学生もいるため、教える側の瞬時に場を読む勘とエネルギーの持続が必要である。学生にとって身近で興味を持てるテーマ選びとその計算された教材の準備が重要である。予習しないでただ席に座り、説明を聞いているだけの学生を作らないことが肝要である [2]。

一方で学生たちに中学・高校レベルの基礎的事項が身につけていないのを理由に、始めから

かなり低いレベルの教材を用いることは、モチベーションの低下を招く危険があり、必ずしもよい結果を招くとは言えない。短大生という年齢相応の部分を尊重しながら対応することが必要であると考え。学力差が最初から存在する学生達をどのような教材を用いて、どのように多数の学生が満足できる授業展開をするか、十分な検討が必要である。

また、学生によっては、中学・高校において伝統的文法訳読法による授業に慣れすぎたためか、教科書の英文を日本語に訳すことが英語の授業の目的であるかのように思っている学生もいる。書かれた英文をその順序のまま理解することにも慣れておらず、実際の読解ではスキミングやスキッピングすることが多いこととその方法も学ぶ必要がある。

授業時間外の質問のために、研究室の場所やメールアドレス等の連絡先を最初の時間に確認しておく。学生は思ったより頻繁に質問や連絡を取ってくるので、メール等で即答するようにしている。

3 授業条件

(1) 当該科目の位置づけ

「英語コミュニケーションⅠ」は総合基礎科目の1科目で、学年配当は1・2年、前期のみ開講、週1回計15回の選択科目である。クラスサイズは前述のとおりで、40名を越えており、ほとんどが1年生で、1年次に履修しなかったごく少数の2年生が加わっている。初回に行うアンケートから見える履修理由は、

- ①英語が好き
- ②他の外国語科目が中国語とハングルの2科目しかない上、それらに挑戦する意欲に欠ける
- ③中学・高校で英語を勉強してきた延長として履修などが挙げられている。

新入学生の半数以上がこの科目の履修を希望していること、後期以降に開講されている他の英語関連科目の履修者数が減少することを考えると、この授業が短大において最初で最後の英語科目になっている学生が多いといえる。科目目標や内容について、総合基礎科目である点を踏まえた上で、履修中も卒業後も含めて、学生にとって長く役に立つ実用的なものにしなければならない。

(2) クラスサイズ

クラスサイズは40人を上限と設定しているが、2004年度は履修登録希望者が84名あり、2年生を優先した上で1年生に対して抽選を行い、合計50名とした。かなり多い人数である。2005年度の履修登録希望者は43名で、全員受け入れた。30名程度のクラスサイズが理想であるが、現実には複数クラス開講は難しいため、この人数を前提に授業計画を考えることが、出発点になる。受講者数が多いため、授業形式は講義型とすることにした。

(3) 使用教室

2003・2004年度は普通教室をしたため、授業中に教材となっているウェブサイトと同時に見せることはできなかった。学期の途中で2回、コンピュータ教室を予約し、その時のみ教室変更を行った。それまでに学んだサイトを実際に確かめ、やり方を説明したゲームも楽しんだ。ウェブサイトを見ながら学ぶことは学生にとって興味を持って能動的に学びたいという気持ちを持つことにつながり、授業効果も高いため[3]、2005年度は視聴覚機器が使用できる教室を希望した。教室内でノートパソコンを学内LANに接続でき、プロジェクターを通してウェブサイトの画面をスクリーンに映し出すことが可能となった。このことは、学生の興味を惹く

上で明らかな効果が見られた。ただし、機器の接続等に多少時間がかかるため、授業前の休み時間に教室に行き、チャイムが鳴る頃にはセットが完了しているようにした。

マイクは使用しなかった。机は3人用4列構成で移動も可能ではあるが、授業が講義型でスクリーンも使用するため、移動等は行っていない。座席の指定はせず、学生には初回の授業において今後私語が多ければ座席指定に変更する方針を伝えた。どの年度においても多少の私語はあっても、座席指定の必要が生じるほどの私語はなかった。ただ、スクリーンが見やすいように後の数列には座らずに前に詰めて座るように指示した。座席指定は教師にとっては学生の名前も覚え易く出欠の確認も容易であるが、雰囲気は少なからず硬直し、授業の活気に欠ける結果になり易い。

この授業でスクリーン画面を見ることの利点は大きいですが、そのためには強制的に自動で窓にある黒いブラインドを閉め、スクリーンを下げ、少なくとも一部の照明を消さなければならない。毎回時間がかかり音も出るためそのたびに授業も中断することになり、授業中に何度も繰り返すことは躊躇せざるを得ない。またスクリーンが下りた状態では教室全体が薄暗いため、学生はノートが取りにくく、教師は黒板の前に下がっているスクリーンのために板書できるスペースがスクリーンの左右の少ない面積に限られる。この黒板の左右両端のスペースは、板書から遠い席の学生からはたいへん見づらい。大きめのホワイトボードを用意したかったが、2005年度は使用できるホワイトボードがなかったのは残念であった。また、これらのことに加え、薄暗さは時として眠気を誘うこともあるため、長時間続けることは避けなければならない [4]。

4 科目目標設定とインターネット

科目目標と教材の選択は深くリンクしている。「英語コミュニケーションI」は、限られた英語科目の中で、総合基礎科目の選択科目として1年生を中心にレベルや意欲に差がある1クラス40名以上の学生に開講されている。それらを踏まえた上で、教材としての英語は、授業の中だけでなくその後もできれば長きにわたって学生にとって役に立つ実用的な、かつ興味の持てる内容でなければならない。単位が欲しいからというようなモチベーションではなく、学生自身が本質的に学びたいというモチベーションを持ちえるような教材で授業を行うことこそ、学習効果を上げるために重要である [5]。

この科目では、英語を狭義に学ばせるのではなく、あくまでも英語で書かれたものの内容を理解するための道具として、社会と学生をつなぐものとしての英語を在学中に学生に身に付けさせたい。それが便利で楽しく有益であることを体験させたい。日本に住んで日本語で生活をしている限り、英語が使えなくてもほとんど不自由はない。特に数年前までは、普通の人が教科書以外の実際の英語に触れたり使ったりする状況はほとんどなかったと言える。教室で学習したことを日常生活の中で試してみることが困難な状況の中 [6]、まるで水の入っていないプールで泳ぎを教えるかのような困難さがあり、使用する機会のほとんどない外国語を学ぶモチベーションはなかなか高まらなかった [7]。個人的レベルでネイティブスピーカーと話す機会を持つことが積極的な学びのために重要であるとされるが [8] 日本においてそのような状況は一部の人を除いて今後もあまり期待できない。

しかし、インターネットの登場は状況を一変させた。今や日本中どこでも居ながらにして、世界中からあらゆるトピックに関する巨大な情

報を多様な言語で得ることができ、それを読んで情報を得る必要性も生じた [9]。インターネットは英語学習者を対象に作られていないが、学習者にあわせて選択し教材として使用することができる [10]。しかし、学生が自分にとって必要な、または興味のある情報を英語で得るためには、インターネットにアクセスすることはできてもその後乗り越えなければならない英語という高い壁が存在する。インターネットを用いたオンラインコミュニケーションの醍醐味はネットサーフィンにあり、自由に動き回るためには英語嫌いの殻を破ることが必要である [10]。この壁を乗り越えることができれば、インターネットを通して世界も広がり、まさに実用的で自由に英語を道具として能動的に使いこなせるようになるだろう。その壁を学生自身が乗り越えることを、「英語コミュニケーション I」の科目目標としたい。

今やインターネットや電子メール等の利用のために必要な読解の能力は、国民全体に求められる英語力であると認識されており、情報機器の活用と関連付けて英語教育の指導法の改善・充実を進めることが重要である [11]。

この授業は、受信型コミュニケーションを中心とする、言語活動の面では、リーディング中心の情報資料の多読に焦点を当てた内容の授業とすることにした。

5 教材

(1) 選択にあたっての留意点

- ①検索の出発点は、既習の日本語のYAHOO!のトップページとし、後日学生自身が迷うことなく検索できるよう、そこから情報をたどっていくことを前提とする。
- ①YAHOO!と Googleの日英のトップページに使われている単語から学ぶことからスタートする。

③教材は、ジェンダー、人種、民族、宗教などに関するステレオタイプを含んだ題材を避けることは大前提である。[4、pp.162-164]内容は学生が親しみを持てるもの、理解し易いもの [12]、日常的基本的な語彙が含まれているもの、幅広い話題からのもの、信頼できるサイトからのもの、スキミングとスキミングの練習ができるものにする。具体的には次のような題材を取り入れる。最新のニュース・1つの話題を多方向から検索できる題材・ゲームのやり方の説明・子供用ウェブサイト・本学の交流協定校のウェブサイト・方法を読んでそれにしたがって入力するサイト等。

④全員が学ぶコアの部分と、より自分で学びたい学生が進んで学ぶことのできる材料が残っているプリント集とする。つまり、教材として配布するプリントのすべてのページのすべての行に至るまでを授業で行うのではなく、一部のみ学ぶプリントも含めることにより、色々な学生に対応することができる。

⑥ウェブサイトを使用するにあたっては、著作権の問題について配慮しなければならない。

(2) 配布方法

ウェブサイトを印刷した教材は、すべてのページに通番でページ番号を付け節約のため両面印刷にした。通し番号がないと、授業中やテスト範囲の指示が的確にできないため、番号を付けることは必須である。プリントはホッチキス止めをして、数回に分けて学生に無料で配布した。分割して配布する理由は、以下のとおりである。

- ①最新のニュースを取り入れるため
- ②かさばらない方が持ち運びに便利
- ③授業の進み具合や学生のレベルとプリント難易度を確認しながら、随時調整や変更が可能

2004年度はプリント集を下記のように4回に分けて授業で配布した。

- プリント集1 (pp1-9) 4/19
- プリント集2 (pp10-21) 5/24
- プリント集3 (pp22-40) 6/14
- プリント集4 (pp41-51) 6/28

学生が予習できるよう、学習中のプリント集が終了する前に次のプリント集を配布した。いずれの年度も、目次を兼ねた表紙を付けた。

配布回数が増えれば内容的にはきめ細かな対応が可能な面もあるが、プリント集を印刷して人数分作成する作業回数が増え負担になること、配布時に欠席した学生に対して、研究室に取りに来るよう伝えておいてもほとんどが取りに来ないため、出席するまで未配布のプリント集を毎回教室へ持って行くことになり面倒であることから、2005年度は3回配布とした。内容は2004年度のをベースに改善し、以下のようにした。

図1 「配布プリント集1」表紙

英語コミュニケーションI 配布プリント集1	
①	日本のヤフー
②	世界のヤフー (日)
③	世界のヤフー (英)
④	カナダのヤフー
⑤	シンガポールのヤフー
⑥	アメリカのヤフー
⑦	UKのヤフー
⑧	Google日本
⑨	Google(英)
⑩	Google 表示設定
⑪	Google Preferences
⑫	Google 検索オプション
⑬	Google Advanced Search
⑭	Google 言語ツール
⑮～⑰	Google Language Tools
2005/4/11 西崎	

(3) プリント集1～3

プリント集1 (図1) は、日英のYAHOO! とGoogleの使い方の説明の部分が中心である。各国のヤフーでは、同日同時刻のものを印刷し、トップページの構成上の違いだけでなく、扱われている最新ニュースや広告の違いなどにも触れた。YAHOO! (USA) のトップページを用いて、Directoryの単語を細かく丁寧に扱った。スクリーン上でそれらの単語をクリックして、その先に広がる世界を確認した。

図2 「配布プリント集2」表紙

英語コミュニケーションI 配布プリント集2	
⑱	Yahooligans! Directory
⑳	Around the World
㉑	School Bell
㉒	Arts and Entertainment
㉓	Science and Nature
㉔	Computers, Games, and Online
㉕・㉖	Sports and Recreation
㉗・㉘	Yahooligans! Games
㉙～㉚	Don't Jump on the Couch
㉛～㉜	Go, Fish, Go!
㉝	Yahooligans! Animals
㉞・㉟	Mammals
㊱	Fishes
㊲・㊳	Insects
㊴・㊵	Birds
㊶	Amphibians
㊷	Reptiles
2005/5/16 西崎	

プリント集2 (図2) では、ヤフーの子供向けサイトであるYahooligans! のDirectoryから始めてそれぞれの分類の中へ進んだ。ここでもDirectoryの単語の学習から始め、まだ日本で公開されていない映画について情報を得たり、ゲームのサイトでゲームのやり方の説明を読み

解き、実際にゲームをいくつかやってみせたりした。Animalsでは、動物の特性や英語名を確認し、小学生が知っているレベルの動物の英語名をピックアップし、小テストに課した。いくつかの動物についての長文も取り入れ、読解練習も加えた。動物に関連するレポートもこの段階で課題とした。

図3 「配布プリント集3」表紙

英語コミュニケーションI 配布プリント集3	
④8	YAHOO! JAPAN
④9	国内トピックス
⑤0	YAHOO! (USA)
⑤1~⑤3	YAHOO! NEWS (The top news headlines)
⑤4・⑤5	MasterCard: 68000 Customers at High Risk
⑤6・⑤7	washingtonpost.com Arts and Entertainment
⑤8	MasterCard International Inc.
⑤9	The Desert Sun
⑥0	交流協定校の紹介
⑥1	Everett Community College
⑥2	Admission and Registration
⑥3	Web Admissions Center
⑥4・⑥5	Set Up a Web Admissions Account
⑥6	International Students: Information
⑥7・⑥8	Intensive English Language Program
⑥9	Lincoln University
⑦0	Information for Prospective Students
	2005/6/20 西崎

プリント集3(図3)では、マスターカードの情報漏洩事件について情報を収集する方法を紹介し、記事を読み比べた。基本となる記事で語彙を学ぶことで、別の記事を簡単に読み解けることを体験させた。最初の記事は別の記事にとってのpreviewとしても有効であった。本学

の海外にある交流協定校のウェブサイトを紹介し、入学するには何が必要か、入学願書のダウンロード方法、その記入方法等を学んだ。氏名の欄だけをとり、姓にあたる単語の説明や姓と名の記入の仕方等、一般の用紙を記入する際にも役立つと思われる練習がいくつもあった。学生の中には、実際にそのうちの一枚に留学を希望している者もいた。普段身に付きにくく教科書に出てこないが、実際に必要な単語、例えば、暗証番号、銀行口座、パスワード入力等の条件等、日本語では何にあたるかを英文の内容から類推させることにより、学生たちが実感として学ぶことができた。

プリントにない言わば番外編として、授業開講当時放映されていた、連続テレビドラマの英語の主題歌をノートパソコンに録音し、歌詞のあるウェブサイトを見つけてスクリーン上に映して解説してから、授業中に何度か聴いた。英詩の韻律について説明し、自分の好きな別の曲ではどうなっているかを確かめるように伝えた。他にウェブ翻訳についてその方法を説明した。実際にウェブ上の英文を翻訳してどのような日本語になるか、現在の機械翻訳の程度を検討し、その限界について話し合った。

6 成績評価

(1) 方法と開示

成績評価の方法は、初回の授業で詳しく説明した。英語が苦手でも真面目にコツコツ学んだ学生が高得点となるような方法となっていることを伝えることで、苦手な学生に安心感を与えるようにしている。100点満点の内訳は、出席点25点、レポート15点、小テスト15点、中間テスト20点、学期末テスト25点で細かく換算し、出席率が高く熱心な受講態度の学生には最後に多少の加点をする場合もある。

シラバスでは、全授業の3分の2の出席を単

位取得の条件にしているが「あと何回休めるか？」としきりに尋ねてくる学生もおり、基準を越えた場合自発的に授業放棄をする学生もいる。欠席がちの学生が、学期途中でもう今から真面目に出席しても単位が取れないと思ひ込み、早い段階で授業を放棄することのないように配慮する意味も含めて、後半の頑張りで見返しが可能になるように学期末テストの配点を25点とした。

成績の開示は、可能な限りわかりやすくしている。筆者自身の大学時代に一度のみの筆記テストで成績が決定する科目の成績評価においてまるで納得がいかなかったことがあったこと、留学先の大学において初めてきめ細かな誠意ある成績評価を体験し、学生としてとても嬉しかった体験は今でも忘れられない。評価する立場の教員は客観性のある公平公正な成績評価をしなければならず、それを目に見える形で学生に開示することが基本である。成績評価方法とその誠意ある実行と開示は、担当科目教師と学生の信頼関係の出発点でもあり、学生が納得していなければ、よい授業結果は期待できない。

テストの返却については、小テスト、中間テストは翌週の授業でポイントを復習しながら返却し、特に問題数が多い中間テストは採点間違いがないことを学生自身に確認してもらう。全体の成績評価結果は一人ずつ個票を作り、学期末テストの解答用紙と共に教学部窓口で返却している。その際、点数や成績が見えないように一部を折って内側にし、ホッチキス止めをしている。返却期間は掲示で周知し、期間中に取りに来ない場合は、処分する旨を伝えている。学生は成績評価に疑問や不満がある場合は調査希望を申し出ることができるが、そういうケースは発生していない。

表1 学生に配布する成績評価個票

学籍番号CZ()氏名()	
出席点	/25
小テスト	/15
レポート	/15
中間テスト	/20
学期末テスト	/25
素点	
成績評価	

(2) レポート

学生は特定のウェブサイトにおいて、指定された範囲内から自分で課題を選び、単語帳と日本語訳（ポイントを書き並べる形でもよい）を提出する。2005年度は、子供用サイトの動物欄（Yahooligans! Animals）にあるDog Breed Guideから、学生自身が興味のある犬種をいくつか選んで課題とした。一人一人が自分自身で課題を行ったことを確認し易くするため、多数の犬種の中から選ばせ、単語帳は手書きを原則とした。イラストや自分が飼っている犬のことを書き加えて提出する学生もいた。

(3) 小テスト

2004・2005年度は小テストとして単語テストを行った。2004年度は、前週の授業で範囲を指定し翌週テストを行った。プリントの何ページから何ページという指定に加えて、授業で説明した単語を中心に出题する旨を周知した。授業中にしっかりノートを取っている学生にとっては、出題内容をある程度絞って勉強することは難しいことではないが、そうでない学生や欠席をした学生にとっては、出題される単語の特定が難しいためテスト勉強に対する意欲に欠

ける場合がある結果となってしまう点は反省点であった。

2005年度は、各回出題範囲から予め単語リストを作成して配布した。配布時には、学生に答えさせる形で単語の意味を簡単に復習する時間を設け、苦手とする学生にとってのキャッチアップの機会とした。リストには50~70の単語を載せ、実際の小テストは雛型を作って定型にして30問を出題、21点以上を合格とした。20点以下の学生は翌週同じ出題範囲から改めて作成した再テストの受験を義務付け、授業時間の最後の10分を利用して実施した。不合格者だけでなく満点以外の合格者にも再度勉強する機会を設けるため、満点以外の合格者が進んで再テストを受けた場合は、1回目と2回目の点数の高い方を2倍した点数を得点とし、不合格者は2回の合計点を得点とした。学生への1回目の単語テストの結果は、テストの2日後に、教学部窓口の協力の下、各自に返却してもらうことによって行い、翌週の再受験の準備ができるようにした。この方法は不合格者にとっては再び同じ範囲を勉強しなおす機会となり、合格者も満点を目指して努力する姿が見られ、ただ単に一度単語テストを行うだけの従来の方法よりも効果があった。

(4) 中間・学期末テスト

6月初旬に中間テスト、学期末試験期間中に学期末テストを実施した。範囲はプリントのページで大枠を指定し、出題ポイントを十分前もって周知、過去の小テストの出題範囲も再び範囲とした。

問題は内容のポイントを問うものを中心とし、英文をそのまま和訳させるものは出題していない。問題数は多めにし、準備をした学生とそうでない学生に差が出やすいように作成している。成績評価の点数に換算するため、得点を定数で割って調整して結果としている。

7 学生による授業評価

本学における学生による授業評価は、統一された用紙に記入された評価を教学部にて集計し、結果に対する担当教員のコメントを加えて学期毎に冊子とし、学生にも公開されている。

この授業の評価は3年分あるが、2004年度から評価の項目と点数が変更されているため、ここでは2004年度と2005年度の結果を以下のように表(表2)にした。統一されている設問は19項目、評価は最高が7ポイント、最低が1ポイントとなっている。20項目目はこの授業独自の設問である。2004年度は受講者50人、回答数28人(回答率56%)、2005年度は受講者42人、回答数28人(同67%)であった。

2004年度と2005年度を単純に比較すると、すべての項目で2005年度が前年を上回っている。この傾向はこの科目特有のものかそれとも2005年度は学内全体の評価が前年より高めに推移したのかが問われるが、全学平均と比較すると、2004年度の評価がほぼ全学平均と同様であったのに比べ、2005年度はすべての項目で全学平均を上回っているため、この授業の評価は前年より上がっていると考えられる。small changeながら授業改善を心がけた結果がおおむね反映されたと解釈したい。

前年より評価平均が1.3ポイント以上上がった項目は、次の5項目である。

2. 教員の板書の仕方はわかりやすかった
4. 指定された教材は学習の役に立った
9. 教員は学生の反応を確かめながら講義をしていた
14. この講義に触発されて自分の考え方が広がったり深まったりした
19. この講義を他の学生や後輩に推薦したいと思う

表2 学生による授業アンケート結果集計

アンケート設問内容		2004年度 評価平均	2005年度 評価平均
1	教員の言葉は明瞭で聞き取りやすかった。	5.3	5.8
2	教員の板書（またはOHP等の表示）の仕方はわかりやすかった。	4.1	5.4
3	講義中の教材（テキスト・プリント等）の使い方は適切だった。	5.1	5.8
4	指定された教材（テキスト・配布資料等）は学習の役に立った。	4.4	5.9
5	毎回の講義の主題・テーマが明確に示された。	4.8	5.5
6	講義の進め方は適切だった。	4.7	5.2
7	教員は講義の準備を十分にしていた。	5.4	5.6
8	講義中、教員の熱意に好感を持てた。	4.7	5.5
9	教員は学生の反応を確かめながら講義をしていた。	4.2	5.7
10	教員は学生に対して公平に接していた。	5.1	5.6
11	教員は学生の質問を大切に扱っていた。	5.0	5.7
12	学生の遅刻、私語などへの教員の対応は適切だった。	5.4	5.9
13	講義はシラバスにそって進められていた。	4.9	5.4
14	この講義に触発されて自分の考え方が広がったり深まったりした。	4.1	5.4
15	講義内容の難易度は適切だった。	4.4	5.3
16	講義内容は興味や関心を引くものだった。	4.5	5.4
17	教員は講義内容に対する理解が深まるように工夫していた。	4.4	5.4
18	この講義は総合的に見て満足できるものだった。	4.4	5.5
19	この講義を他の学生や後輩に推薦したいと思う。	4.0	5.4
20	この講義を受けて、今後海外のインターネットにアクセスしてみようと思った。	質問せず	5.8
年度別 平均		4.7	5.6

2の設問の板書については、スクリーンとの関係で黒板の面積が確保できないことも多く、反省点でもあったが、学生はそれほど不便を感じていなかったのかと意外に思った。教材は配布プリント集のみであるため、4の設問はある意味当たり前の結果でもあるが、無駄なく十分役立つよう更に改善していきたい。9の設問は

ウェブサイトを次々とクリックしていく際も、行きつ戻りつを繰り返しながらクリックし、インターネットの経験の少ない学生が、授業後学生が1人でサイトに辿り着けるようにも配慮しながら進めたこと、授業中何度も説明がわかっているか尋ねながら進めたことが学生にはよかったと思われる。14の設問は20の設問とあわ

せてこの科目の目的でもあり、より高い評価を目指したい項目である。

一方、前年と評価の上昇が0.5ポイント以下であまり変化がなかったといえる項目は、次の6項目である。

1. 教員の言葉は明瞭で聞き取りやすかった
6. 講義の進め方は適切だった
7. 教員は講義の準備を十分にしていた
10. 教員は学生に対して公平に接していた
12. 学生の遅刻、私語などへの教員の対応は適切だった
13. 講義はシラバスにそって進められていた

これらの評価平均はそれぞれ、5.8、5.2、5.6、5.6、5.9、5.4であり、授業の進め方とシラバスについての項目の評価が比較的低く、次年度以降の課題と言える。

8 更なる授業改善に向けて

2006年度の「英語コミュニケーションⅠ」は、2005年度の内容を基本にして行う予定である。以下のような視点を持って、更なる授業改善を目指していきたいと考えている。

- ①受信のみでなく、インターネットを使って発信する英語の授業
- ②英語学習サイトを利用した学生の自学自習
- ③プロジェクトを行うことにより、ネットサーフィンを目的のある集中した学習を行うツールとして使いこなす授業
- ④信頼できるウェブサイトを判断する目を身に付ける練習
- ⑤ポストリーディングの活動を通して定着をはかる工夫 [13]
- ⑥英語学習におけるインターネットの役割について常に見直し、理解を新たに続ける姿勢 [3, p.153]

引用文献

- [1] Fanselow, J. 1987, *Breaking Rules*, New York, Longman Inc., pp.1-18
- [2] 大石強「外国語授業改善の展望」『大学教育研究年報』第3号、1997年、p.257
- [3] Warschauer, M., H. Shetzer, C. Meloni 『インターネット時代の英語教育』、ピアソン・エデュケーション、2001年、pp.146-153
- [4] 池田輝政、戸田山和久、近田正博、中井俊樹『成長するティップス先生』、玉川大学出版部、2001年、pp.97-98
- [5] Ehrman, M.E., 1996, *Understanding Second Language Learning Difficulties*, Thousand Oaks, SAGE Publications, pp.138-143
- [6] 文部科学省『「英語が使える日本人」の養成のための行動計画』、2003年
- [7] Larsen-Freeman, D., M.H. Long, *An Introduction to Second Language Acquisition Research*, Edinburgh, Addison Wesley Longman Ltd, pp.173-175
- [8] Littlewood, W., 1984, *Foreign and Second Language Learning*, Cambridge, Cambridge University Press, p.58
- [9] Aebbersold, J.A., M.L. Field, 1997, *From Reader to Reading Teacher*, Cambridge, Cambridge University Press, pp.36-37
- [10] Teeler, D. 『英語の授業に活かすインターネット』ピアソン・エデュケーション、2001年、pp.75-77
- [11] 岩村圭南『インターネットで英語学習』アルク、1995年、p.13
- [12] 文部科学省『英語指導法等改善の推進に

関する懇談会報告』、2000年

- [13] Graves, K. 1996, “A framework of course development processes” , in *Teachers as Course Developers*, ed. Kathleen Graves, Cambridge, Cambridge University Press, pp.26-27
- [13] 岡秀夫、赤池秀代、酒井志延 『「英語授業力」強化マニュアル』大修館書店、2004年、p.117